

BLEACH — 神崎沙織の日常

桂ヒナギク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

虚に狙われた沙織は死神の力を発揮して……。

E
p
i
s
o
d
e

2

5

E
p
i
s
o
d
e

1

1

目
次

Episode 1

私は神崎 かんざき 沙織 さおり。

霊が見える、話せる、触れる、以外はいたって普通の高校生だ。

「ただいまー」

空座第一高校から真っ直ぐ帰宅。

「おかえり、お姉ちゃん」

と、弟の太一 たいち が出迎える。

「今日、お父さん遅くなるって」

「そう」

太一は小学二年生である。

「じゃ、今日はお姉ちゃんが太一の好きなハンバーグ作ってあげる」

「やったー!」

「それじゃ、着替えてくるね」

私は階段を上り、自分の部屋へ。

「……?」

部屋の真ん中に黒い袴姿の女が立っている。

「誰?」

「近い」

「近いじゃねえよ!」

私は女に蹴りをお見舞いした。

「どわ!?!」

女は尻餅をつく。

「貴様、私が見えるのか!?!」

「見えるから蹴り入れたんだろ!?! ていうかあんた何よ!?! ここ私の

部屋なんですけど! ははーん、さては泥棒ね?」

「泥棒ではない。私は死神だ」

そう言っつて、女は腰に携えている刀を抜いた。

斬られる、そう覚悟した私だったが、女は刀の向きを変え、私の背

後にいた霊の額に柄を当てがった。

「いやだ、私はまだ地獄には」

「案ずるな。お主の向かうところは尸魂界だ。地獄と違ってき氣安いところぞ」

「な、何したの?」

「魂葬したのだ。お主らの言葉では、成仏と言ったか」

「なんかよくわかんないけど、除霊してくれたのね。いることには全く気づかなかったけど」

「そんなことより……!?!」

階下から爆発音のようなものが聞こえた。

「なんだ!?!」

私が階段を駆け下りると、食卓の壁が倒壊していた。

「うわああああ!」

太一の悲鳴。

壁の穴から外に飛び出すと、仮面で顔を覆った、胸に穴のある怪物が、太一を食べようとしていた。

「太一!」

怪物は私に気づくと、太一を放り投げ、こちらに接近してきた。

やられる! そう覚悟した刹那、先ほどの死神を名乗る女が、私を庇って怪物の攻撃を受け止めた。

「ぐわ!」

右肩を負傷した女は、左手で光弾を発射し、怪物を吹っ飛ばした。

「くそ、右腕をやられた。このままでは……」

「あいつ、私を狙ってる?」

「ああ。貴様の霊圧が異常なほど高いからだろう」

女が私を見る。

「貴様が生き残るための方法が一つだけある。試すか?」

「その方法を取れば、あいつを倒せんだな?」

「成功すればな。どうする? このままだとお互い犬死にだ」

「やってちょうだい」

「いいだろう」

その時、怪物が光線を放ってきた。

「危ない!」

女が力を振り絞って私を突き飛ばす。

「うわー！」

女は光線の直撃を受け、吹っ飛んだ。

「死神ー！」

私は女に駆け寄った。

「おい、しつかりしなつて」

「く……」

「さっき言つた方法を！」

だが、女は意識を失つてしまう。

くそ。どうしたら？

怪物が接近してくる。

私は女の刀を取り上げた。

「ああああー！」

怪物に駆け寄り、刀を振るう。が。

「うわー！」

カウンターを受けて私は吹っ飛んだ。

地面を転がる私の体。

覚束ない足取りで立ち上がった瞬間、怪物の手が私の霊体を肉体から押し出した。

「がー！」

壁にめり込む。

「い、これは!？」

私の霊体は、女と同じ姿をしていた。

「よくもやつてくれたな！」

私は背中の大刀を抜き、怪物に迫った。

「はあー！」

一撃で怪物の額を貫き、消滅させる。

私は自分の肉体に近づく。

抜けたってことは、死んだってこと？

「いや、貴様は死んでなどおらん……」

「へ?」

「まさか、貴様が死神だったとは」

「え、私が？」

「とりあえず、肉体に戻れ」

「あ、うん」

私は自分の肉体に入った。

Episode 2

「わああああー!」

ベッドの上で目を覚ます。

恐ろしい夢を見た。

食卓の壁が破壊され、太一が襲われる。

そして私が死神になり、怪物を倒すという。

空腹を感じた私は、階下へ降りる。

「何じゃこりやあ!」

私は食卓の破壊された壁を見て驚いた。

「あ、お姉ちゃん。これ、昨夜トラックが突っ込んできたんだよ」

「トラック?」

「うん。でも幸い人的被害はなかったんだ」

「そう。……って、太一怪我は?」

「だから被害……」

「じゃなくて、怪物に襲われた時のだよ!」

「怪物? 何言ってるの?」

だめだ。混乱して頭の整理が追いつかない。

そういえば、あの女どうしてるかな。

「お姉ちゃん、ご飯まだ? 早くしないと遅刻しちゃうよ」

「ああ、そうだったね」

私は大急ぎで朝食の支度をした。

食べ終えた私は、太一を見送り、壁の修繕作業をしてから学校に向かう。

学校に着くと、例の女を見かけた。

うちの制服……。

女が振り返る。

「あら?」

疑問符を浮かべた。

「あなたが神崎 沙織さんですの?」

「神崎、こちら今朝編入してきた春原 すのほら 紗子さん さえこ」

と、クラスメイトの男子が言う。

「あ、あんたこんなところで何してんのよ?」

「あれ? 知り合いだった?」

「ちよつと来て!」

私は紗子を屋上に連れ出した。

「あんた何やってんの?」

「力を回復させてるだけだが?」

「そう。てか、なんでみんなに見えてんの?」

「義骸に入ってるからな」

「ギガイ?」

「ああ。極端に力が下がった時に回復させるために使う仮の肉体のことだ」

「なるほどね。それで、なんでうちの高校なの?」

「貴様のことを尸魂界に報告したのだが、そしたら監視を頼まれてな」

「監視?」

「尸魂界にとって有益となるか判断するための材料が欲しいらしい」

「さつきから言ってるそのソウル……ってなに?」

「ソウル・ソサエティ尸魂界だ。貴様らの言葉では天国、といったところか」

ピ。ピッ。ピ。ピッ……。

紗子の懐から電子音が鳴る。

「伝令か」

通信端末を取り出し、画面を見つめる紗子。

「なに?」

「どうしたの?」

「ホロウ虚だ」

「虚?」

「貴様が昨晚倒した怪物だ」

「あんなのがまだうろついているっていうの?」

「絶え間なくな」

紗子が悟魂手甲ごこんてつこうという手袋状のものを手にはめる。

「いくぞ!」

「え？」

油断していると、紗子が私を突き飛ばし、霊体を肉体から押し飛ばした。

「うわー！」

ひっくり返ると同時に、私の肉体が倒れる。

「ついでに！」

「は？」

「いいからこい！」

紗子に引き摺られ、私は公園にやってきた。

男の子の霊が化け物に襲われている。

「やつを倒してくれ！」

「あんたがやればいいじゃん！」

「何を言っておる。私の体力はそこまで回復してはおらん！」

「へいへい！」

私は斬魄刀という刀を抜き、怪物に迫る。

虚はこちらに気づき、方向転換して襲ってきた。

「うおりゃー！」

私の刀が虚の額に突き刺さり、光の粒子となって消滅する。

「ありがとう、お姉ちゃん！」

と、男の子の霊は言う。

「魂葬してやれ！」

私は霊の額に斬魄刀の柄を当てがう。

男の子は天に昇っていった。

「いい働きだ！」

と、紗子。

「帰るぞ！」

私たちは学校へと戻るのだった。